

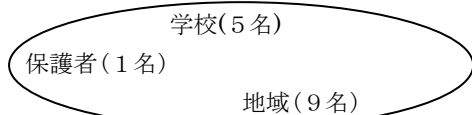
令和元年度 福井型コミュニティ・スクール 実施報告書

福井市鷹巣中学校

1 「家庭・地域・学校協議会」の運営について

(1) 「家庭・地域・学校協議会」の構成

「家庭・地域・学校協議会」の組織図



<学校地域協働本部の組織>

自治会連合会、公民館長、同窓会長、交通安全協会、市民育成会議、民生児童委員他

<地域コーディネーター(全9名)>

子ども育成会長、社会福祉協議会長、鷹巣観光協会会長、民生児童委員、鷹巣荘支配人、地域活性化プランナー、岩尾醤油店主、元民生児童委員、鷹巣公民館主事

(2) 協議会の内容

① 開催回数 3回

② 開催日程

第1回 6月20日 合唱発表会

第2回 11月24日 わが町「たかす」発表会

第3回 2月26日

③ 協議内容

第1回 「本校の教育課程の共有」

「中学校区の教育プランの共有」

第2回 「教育活動の参観」

「鷹巣『希望の塔』の制作」

第3回 「教育活動の振り返りと今後の課題」

(3) 学校協議会における成果と課題

「社会に開かれた教育課程」として、学校と地域の代表とが教育目標を共通理解につとめてきた。地域からの学校へのニーズを聞いて学校でできることやできないことを確認したり、学校から地域へ協力を要請したりできた。特に、今後、ネットの利用の仕方や読書について保護者を巻き込んだ取組が求められる。



2 地域と進める体験活動

(1) 活動のねらい

教育目標「地域とともに歩み、未来を切り拓く生徒の育成」を目指し、身近にあって気づかない鷹巣のよさを再認識して、1年「鷹巣から世界へ」、2年「鷹巣のよさを世界へPRしよう」、3年「鷹巣 IJU プロジェクト」のテーマのもと、粘り強く最後までやり遂げる精神を養い、将来の地元の担い手づくりに取り組んだ。



(2) 活動の実際

① 1年生は、まちづくり福井(株)の協力を得て、駅前のまちづくりについて学習した。町の活性化を図るには〇空き屋を効果的に再利用すること、〇様々な体験型イベントを行うことが重要だということ学んだ。鷹巣では、空き屋をリノベーションして静かに本を読んだり勉強したりできる空間など可能性を考えた。体験型のイベントとして、インスタ映えする鷹巣絶景さがしや鷹巣海岸で拾った貝殻でつくるレジン(アクセサリー)、海にかかる天の川の天体観察会などを提案した。実際、貝殻を使ったアクセサリーづくりや鷹巣海岸沖の海水を煮詰めた塩づくりを行った。鷹巣の自然や伝統を大事にしながら、持続可能な地域活動を継続していく。

② 2年生は、鷹巣の良さをPRすることと鷹巣を活性化する方法を学ぼうと金沢城址を訪ねた。鷹巣の貝殻をつけた、手作りコースターと鷹巣の景色の手作り絵はがき、英語で書いた手作り観光マップをお土産に、金沢の観光客を相手に鷹巣の宣伝を行った。特に、外国人に対しては、英語で説明した。鷹巣の自然や文化の良さを本当に理解して、来年度、東京上野公園で鷹巣の魅力をわかりやすく発信することが目標である。



③ 3年生は、地元の人口減少を課題に関係人口を増やすための取組を考えた。昨年、夏休みには地元へ調査活動を行い、6つの提案「海水浴以外の観光」、「観光客目線からの提案」、「空き家の活用」、「新しい特産物」、「鷹巣レジャー計画」、「鷹巣の伝統文化」を行った。

(例えば、「空き家の活用」からは、空き家を海に見えるハンバーガー屋さんとして活用するなど。)今年度、修学旅行に同行した2名の地域コーディネーターと一緒に、南青山の福井アンテナショップで準備した手作りポップ、パンフレット、PRビデオを用いて人を呼び込んで、鷹巣の特産物を販売できた。



(3) 地域コーディネーターの活動概要

各学年の発達段階に合わせて総合的な学習で地域創生プロジェクトのテーマを掲げ、地域の体験活動の中で支援していただいた。1年生は、福井市駅前でリノベーションする企業からの学びを元に、地元にかえって観光協会会長、鷹巣荘支配人から自然・文化の継承とその課題について話を聞いた。2年生では、地域コーディネーターからの意見を参考に地域の外へのPR内容を考えた。3年生では、地域活性化PJリーダーと岩尾商店主の2名が修学旅行に同行してくれて、生徒と一緒に福井アンテナショップでの特産品(梅醤油、ワカメ、鷹巣梅干し)の販売を行った。事前準備では、特産物の歴史やポップづくりなど指導を受けて、PRパンフレット、PRDVDを制作した。



(4) 特に工夫した事項

「鷹巣創生プロジェクトの推進」を、本校のスクールプランの努力目標に掲げた。それは、生徒が自主的に地域活動に参画すること、学校で学んだことを地域に生かすこと、持続可能な地域活動に取り組むことであった。地域との交流を通して、「地域を変えた」という自己達成感や「地域に役立った」という自己有用感を味わわせるためである。子どもは、時代の変化に対応し、全く新しいものを形にする可能性がある。しかしながら、地域の未来を思い描くとき自分の将来の可能性を限定してしまう傾向がある。そこで、自分もいろいろ勉強していくことでいろいろなことが見つけられるという環境づくりを心がけた。特に、外部から福井大学教授や学生、地域活動推進研究員の紹介でUターンした企業人との交流や地元企業での職場体験を通して、生徒の視野を広げ外の世界とつながれた。

(5) 成果と課題

11月24日に第2回わが町たかす学習発表会を開いた。テーマ「鷹巣の未来を語る」として全校でシンポジウムを行った。今回、福井大学から工学部教授川本義海先生と川本ゼミの学生をアドバイザーに迎えた。7名の学生は全員県外出身で、兵庫や大阪、長野、滋賀、そして、マレーシアや中国。生徒や地域コーディネーターと一緒にステージに上がり、短い時間だったが、鷹巣の未来について話し合った。20年後地元に残ると答えた生徒は62%。住み続けたい町にするため、守り続けていくもの「海、夕陽、人とのつながり」と、形にしたい新しいもの「交通手段やいろいろなお店、鷹巣のインスタグラム、新しい仕事」などをあげた。地域コーディネーターや大学教授からは、子どもたちへ「いろいろ勉強して外の世界とつながること。地元を離れて暮らしてみても違ふところの空気を吸ってみることも大事」とアドバイスされた。その後、1、2年生は大学生と交流した。話題は、新しい発想での地域PRから学生生活のプライベートなことまで広がった。地域が時代の変化に対応して行くには、若者が必要になる。地域の担い手である子どもたちは、自分の可能性を広げて、地域の外部のよい力を吸収していた。しかし、学校と地域の「社会に開かれた教育課程」の認識には温度差がある。地域とより連携し生徒を支え地域創生につなげていくことが課題である。



